岡山大学経済学会雑誌28(4),1997, 395～415

《翻　訳》

フォルカー・ルーラント「ザクセン九月騒乱期の3人の重要人物」(Ⅱ)

松　尾　展　成

第3節　ベルンハルト・アウグスト・フォン・リンデナウとザクセン王国における1830—31年の反封建的民衆運動

1854年のキリスト昇天祭に［テューリンゲンの］アルテンブルク市民は比類のない葬儀を経験した．同市の教会の鐘が朝の4時を告げると，死者の生家であり，住居であったポールホーフ館（Pohlhof）から，長い葬儀の列が，小路，街路と広場を通って，教区の墓地へ進んでいった[1]．

76歳の誕生日の直前の5月21日に死去したベルンハルト・アウグスト・フォン・リンデナウの死出の旅には，深く悲しむ多数の人々が付き添っていた．その中には，農村・都市行政官庁，ライプツィヒ大学とドレースデン工業学校の代表，ザクセンとアルテンブルクの邦議会と政府の代表，諸外国の使節，とりわけ，ザクセン王国，アルテンブルク邦，その他のテューリンゲン諸邦の夥しい住民が含まれていた．あらゆる住民層がそこにいた．資本家も，労働者，農民，手工業者，知識人，芸術家，科学者，聖職者も，いたのである．悲しみに沈んだ，これほど多くの人々から墓地教会の近くの墓所で別れを告げられたベルンハルト・フォン・リンデナウとは，どのような人物であったのか．

フランス大革命勃発の10年前に生まれた彼は，啓蒙主義とドイツ古典主義の模範に従って教育を受けて，私欲のない古典的教養人となった．彼は，死ぬまで，あの模範から外れることはなかった．彼はゲーテ時代の多くの名士と同じように，普遍的な教養を身に付けており，アレクサンダーとヴィルヘルム・フォン・フンボルト兄弟やカルル・グスタフ・カールスと，気質がきわめて似ていた．自由主義的な資本家の立場に立った，彼の進歩的な政治活動は，シュタイン男爵およびハルデンベルクと比較されうるものである(2)．

同時代人は一致して彼を，非常に親切で，平衡を好み，作法がきわめて優雅で，人情に良く通じた人である，と記述している．彼は貴族の尊大さとはまったく無縁であった．彼は，「男爵」という呼び掛けを謝絶して，この称号は「馬鹿な悪魔」を本来意味している，と述べ，さらに，「このことは残念ながら，この人種については50回の中の49回までは事実によって証明されている(3)」，と付け加えた．

人間としての，また，職務上のリンデナウの履歴は希有なものであると言ってよい．

リンデナウは1779年6月11日にアルテンブルクに生まれたが，彼の少年時代に関しては記録が少ない．彼は両親の下で厳格に教育された．ライプツィヒ大学で法学と官房学を学んだ後，リンデナウは1798年5月30日に［ゴータ・］アルテンブルク［公国］の会計官補（Kammer-Assessor）となった．この会計局（Kammer）はアルテンブルク地区の領邦君主直轄地を監督し，その財政，鉱山，精錬所，造幣所，郵便，さらに，公的建造物を管轄の下に置いていた．リンデナウは余暇には数学と天文学の研究に打ち込んだ．研究と同時に彼は数学の講義を聴講した．ゴータ市近郊ゼーベルクの天文台の台長で，全ヨーロッパに名を知られていたフランツ・フォン・ツァッハ（Franz von Zach[1]）は，リンデナウを前途有望な若い天文学者として同市に招き入れた．

その後リンデナウは会計顧問官に任命され，1807年からは天文台を監督す

ることになった．彼は当時の著名な天文学者と文通し，その数人，とくに，ゲッティンゲンのガウス（Gauß[2]）とケーニヒスベルクのベッセル（Bessel[3]）とは親交を結んだ．ガウスはリンデナウを最も親愛な友人と呼んでいた．

ヴァイマルでは彼はさまざまな人と交際した．彼はゲーテおよびカルル・アウグスト公[4]と密接に，また，多面的に接触した(4)．国際的に称賛された科学者としての彼の活動［の時期］を彼は後年になって，人生で最も幸福な時期であった，と述べている．天文学の分野における彼の卓越した業績が評価されて，月面のクレーターの一つには，実に名誉なことに，彼の名前が付けられている(5)．

リンデナウはゲーテの推薦によって，カルル・アウグスト［公］の高級副官の陸軍中佐として，1814年の［対ナポレオン］戦役に参加した．ロシア皇帝アレクサンドル一世は戦役の間にリンデナウを知り，土地測量を指揮するための参謀の地位を彼に提供した．しかし，この交渉は具体的な結果には至らなかった．

1817年にリンデナウは，10年以上も科学者として成果を挙げた後に，主君の要請に基づいて官吏の勤務に戻った．1820年1月には彼はゴータ［・アルテンブルク公国］の大臣となった．1825年にフリードリヒ公[5]が死去すると，リンデナウは，相続権を持つ，コーブルク公[6]，ヒルドブルクハウゼン公[7]，および，マイニンゲン公[8]の委託によって，1826年9月の相続分割まで1年間，事実上単独で統治した．そのために彼は民衆から，恭しく「ベルンハルト公」と呼ばれていた．

その後，彼はザクセン国王フリードリヒ・アウグスト一世の要請を受け入れて，ザクセン王国の官吏となった．彼はまずフランクフルト・アム・マイン駐在の［ドイツ］連盟議会代表となり，1829年には枢密顧問官兼邦経済委員会長官としてドレースデンに呼び戻された．

ドイツ諸邦では市民的改革が，1789年のフランス革命の影響の下で改革の

道として始まったが，1830年秋までのザクセン王国は，市民的変革が開始されていない，少数の邦の一つであった．そのために，反動的な内局大臣デトレフ・フォン・アインジーデル伯爵の体制の下で20年代には，封建制の内部で成長しつつある，経済的基礎の資本主義的諸要素と，農業になお支配的な封建的生産関係，封建的＝反動的な政治体制の間の矛盾が，急速に尖鋭化していた．1827年の王位継承は事態を一層悪化させた．なぜなら，すでに老年に達していた新国王アントーンの下では，事態は少しも変化しなかったからである．アウクスブルク信仰告白300年記念祭をきっかけとした，ライプツィヒとドレースデンの1830年６月の自然発生的な民衆騒擾は，政治的危機の尖鋭化を最も明白に示しており，その後の革命的な対立の最初の前触れであった．

フランスの七月革命は国際的な影響を及ぼした．それはドイツでも，新しい質の階級闘争をもたらした．ドイツ諸邦の中でザクセン王国は，七月革命の刺激的な影響の下で，革命的な状況が小規模国家の枠の中で形成され始めた，最初の邦であった．こうして，社会的な弊害に対する民衆の自然発生的な騒擾が発生し，それは，瞬く間に邦全体を深刻な危機に陥れた．

運動はライプツィヒの九月騒擾から始まった．それは都市参事会の専制と警察の恣意的支配に対して主として向けられた．９月９日にはドレースデンに飛び火し，最初は都市共同体の弊害に向けられた民衆の騒擾は，次第に封建官僚制的な国家権力の中心と直接に対決することになった．

支配階級の最初の反応は一つの政府委員会の設置であり，この委員会は首都の市民と住民に対して，公安の回復と所有の保護のために民兵団の創設を呼び掛けた．しかし，支配的な封建貴族は，民兵団が反封建的な民衆運動を制御できない場合には，躊躇せずに軍隊の投入を命令し，軍事力を容赦なく行使するつもりであった(6)．

この計画を危急の場合には実現するために，アインジーデル政府は相応の軍隊をドレースデンの周辺に集結させた．約２千人の兵士が同市周辺にいた

のである[7]．この軍隊の装備は抜群であり，その展開能力は強力な騎兵部隊によって増大していた．

ドレースデンにおける反封建的な運動の圧力，国内における革命的騒擾の急速な伝播，および，最も重圧的な封建的障害を除去・変更するためにあの委員会に提出された請願書・苦情書の氾濫によって，上級・最上級国家官吏の一部も，旧来の方式の統治の継続がもはや不可能であることを，理解した．程度の差はあるとしても，広範な改革を開始する必要について，責任ある多くの政治家の間に，見解の大きな相違はなかったのである．非常に保守的な見解を持つ人物として知られていた［ドイツ］連盟議会代表で，後に大蔵大臣となった，ハインリヒ・アントーン・フォン・ツェッシャウでさえも次のことを承認しなければならなかった．「旧来の方式の継続は不可能であること，フリードリヒ・アウグスト老王［一世］のしばしば称賛される統治が，時代の要求に照応せず，我々をあまりにも長い間，旧い状態に縛り付けてきた，という大きな非難は当然であり，根拠があること，を私は十分に認める[8]」．

この差し迫った状態の中で支配階級は，広範な譲歩という犠牲を払う以外に，その権力を維持できないことを理解した．王子ヨハンが形容したところの，最初の「不可避的な一歩[9]」は，憎まれていた内局大臣，フォン・アインジーデル伯爵の免職であった．これを国王が決意したのは，1830年9月13日の朝であった．アインジーデル夫人の書簡によれば，国王アントーンはこの処置の根拠を次のように述べた．「なぜなら，国王，王家と邦の繁栄がそれを要求し」，アインジーデルは「邦全体にとって好ましくないからである[10]」．1830年9月19日にアインジーデルは，彼の義兄弟であるヴィーン駐在ザクセン公使，フォン・デア・シューレンブルク（von der Schulenburg[9]）伯爵宛ての書簡で自分の活動を要約したが，その中で彼は時代の出来事を正しく把握して，「時代は終わった[11]」，と書き記した．

国王アントーンは，国民各層に非常に人望のあった自由主義貴族ベルンハ

ルト・アウグスト・フォン・リンデナウを，アインジーデルの後任に任命した．恐らくアインジーデル自身が，辞任の際にリンデナウの大臣任命を提案したのであろう．これは，シューレンベルク宛てのアインジーデルの9月12日付け書簡によって確認される．彼は次のように書いている．「すべての点で望ましい和解を実現するために，多分リンデナウを用いることが可能であろう．いずれにしても，信頼されている人物に対して，世論は非常に良い[12]」．ザクセンの住民はリンデナウを信頼していたのである．

1830年9月の民衆の騒擾によってザクセン政府の頂点に立った時から，リンデナウは，みずから告白したところでは，彼の「相当に決然として合理主義的な傾向」のために，［カトリックである］ドレースデンの宮廷に強い影響を持つ「ローマ教皇党」と「絶え間なく対立[13]」することになり，反動的な敵手の持続的な抵抗に逆らって，彼の改革政策を実施しなければならなかった．彼の政策は貴族支配の維持を目指していた．それは，ブルジョア民主主義革命の前提がドイツにおいてまさに成熟し始めた時に，なお可能な唯一の道であった．プロイセンの愛国的改革者たちが四半世紀前に着手したものが，進んだ新しい条件の下で，反封建的な民衆運動の圧力の下で初めて，今やザクセンで実施され，さらに展開された[10]．

リンデナウの［大臣］任命に対する，後の国王ヨハンの所見は示唆的である．ヨハンの政治姿勢を表明している，この所見は，宮廷と政府の中の，古いものに堅くしがみ付いている封建反動的部分に対する，自由主義的な内局大臣の複雑な立場を示している．ヨハンは次のように想起している．「私がこの地位にはリンデナウよりもむしろツェッシャウを望ましいと思ったことは，当時の私の考えからして怪しむに足りない．しかしながら，実際に行なわれたことは良かった，と私は考えている．なぜなら，リンデナウはむしろ理念の人であり，世論を味方にしていたからである」．最後にヨハンはこの任命を祝福して，書いている．「老人（国王アントーン――著者）はこのとき適切なことをした．なぜなら，リンデナウは明らかに時の人であったからで

ある[14]」．白髪のゲーテは，ザクセン政府の頂点にあるリンデナウの活動を歓迎して，次のように述べた．「ドレースデンでは政治が最上になりそうである[15]」．

闘争的な性格をまったく持たない，この自由主義貴族［リンデナウ］が，彼の改革構想を実現するために，いかに厳しい対立を解決しなければならなかったかは，彼の回顧的な文章に最も的確に示されている．［ザクセンにおける］国家改革の数年間は彼を「肉体的に破壊し，老人にしてしまった[16]」，と．尖鋭化する階級対立の中で押し流された彼は，反動の圧力の下で1843年に政治から引退した．

1848年の数カ月間，彼はもう一度［政界に復帰して，］アルテンブルク代表となり，フランクフルト・パウロ教会のドイツ国民議会の左派に属した．1848—49年革命の初期の成果の印象の下で彼は，ローマの美術商ブラウン（Braun[11]）博士宛ての1848年4月6日付け書簡に次のように書いた．「より良い将来が現在の運動から発展する……であろうことを，私は疑わない[17]」．しかし，ゴータの宮廷顧問官ベッカー（Becker[12]）宛ての1848年8月22日付け書簡からは，別の語調が感じられる．その中でリンデナウは書いている．「ドイツの分裂，混乱，品位のなさという恥ずかしい感情が，私の中に今ほど重くのしかかっている時は，かつてなかった．私は，それを思い出さないように，パウロ教会の議事録を私の周囲から遠ざけた．議会では，言葉は多いが，行動は少しもない[18]」．この政治的諦念が，4つの委員会で6カ月間，誠実かつ真剣に活動した後，リンデナウが［国民議会］議員を辞任した主要な根拠であろう．

すべての史料はリンデナウの正義感と能力を一致して強調している．彼は，その清廉さと強い性格のために，メッテルニヒ時代にはまったく異常な人望を得ていた．歴史に残る彼の功績は，1830年に始まり，彼は市民的改革に決定的な影響を与えた．ザクセンにとって進歩的であった，1831年9月4日の憲法，1832年2月2日の都市自治体法と1832年3月17日の土地改革法

は，決定的に彼の尽力に負っている．これらの法律は19世紀ザクセンの経済的・文化的発展の基礎となったのである．

リンデナウの人柄と彼の改革志向の性格にとって特徴的なことは，彼が最初からメッテルニヒの激しい怒りを招き，反動派によって「ジャコバン派で，人民の友」と非難された事実である．さらに，彼の精神的遺産は，首尾一貫した，平和への意志であり，これが彼の現実の政策の主要基準であった．生涯にわたってリンデナウは戦争を，他の手段による政治の継続として非難した．晩年に彼は1853年3月26日付けでイエーナ大学教授シャイトラー（Scheidler[13]）博士宛てに書き送った．「私は戦争の弁護に対して抗議したい．なぜなら，我々の同胞を殺害して正義を獲得しようとする志向を，私は，キリスト教と哲学から見て，最高の不正と考えるからである．我々は，かつての自力自衛を廃止したと豪語している．［しかしながら，］最も悪いもの，すなわち，戦争を存続させているのである(19)」．

リンデナウはドレースデンの王立芸術・科学コレクションの総監督としても大きく貢献した．その活動によって彼は，「ドレースデンのコレクションの救済者(20)」という称号を得た．彼は，従来ほとんど保護されていなかった絵画の修理のために，相当の金額を初めて定期的に支出する計画を，邦議会に承認させた．同時に彼は，しばしば国王の抵抗を抑えて，注目すべきいくつかの革新を実施した．例えば，リンデナウは特定の日におけるコレクションの一般・無料公開を規定した．多くの制限があったにもかかわらず，これはもちろん大きな進歩であった(21)．

リンデナウはさらに画廊委員会を設置し，その委員に彼は，美術愛好家フォン・クヴァント（von Quandt[14]），フォン・フリーゼン（von Friesen[15]）男爵，画廊監督マテーイ（Matthäi[16]），さらに，3人の教授フォン・フォーゲルシュタイン（von Vogelstein[17]），ハルトマン（Hartmann[18]），ベンデマン（Bendemann[19]）のような芸術通と専門家を任命した．この委員会の活動領域は新規購入の共同決定にも，コレクションの保

護，維持，保存のためのすべての措置にも及んだ．それによってこの委員会は，国王が従来持っていた専断権を廃止したのである[22]．

ルートヴィヒ・リヒター (Ludwig Richter[20])，エルンスト・リーチェル (Ernst Rietschel[21])，あるいは，ゴットフリート・ゼンパー (Gottfried Semper[22]) のような著名な芸術家がドレースデン［美術アカデミー］の教職に招聘されたのも，リンデナウの芸術的感受性に負っている．彼の死後リーチェルがアカデミーの依頼によってリンデナウの肖像メダルを製作した事実[23]は，ドレースデン芸術コレクションの繁栄のための彼の功績を雄弁に物語っている．もちろん，芸術コレクションのためのリンデナウの活動は，芸術家自身によっても高く評価されていた．例えば，リーチェルの1838年11月21日付け書簡がこれを示している．「(美術) アカデミーにとって可能なことは，非常に尊敬されている大臣フォン・リンデナウの下で行なわれた[24]」．

リンデナウは早くからその給与の5分の1しか受け取らず，ザクセン政府の首席大臣としての労苦多い仕事を，書記とほとんど同じ給与で果たしていた，という事実を隠しておくならば，この重要人物の記述として不完全であろう．さらに彼は，国家からの年金のすべてを，貧しい画家，教師，聖職者，工業学校学生の支援のために，また，その他の慈善目的のために用いたのである[25]．

1852年の遺言状においても彼は大きな金額を公共目的のために提供した．さらにまた，リンデナウは公衆のために「リンデナウ＝ツァッハ財団」を設立した．書籍，天文器具，地図および高価な貴重品のような彼の莫大な収集品を彼は，その目的のためにアルテンブルクに建造された建物とともに，「若者を教育し，老人を楽しませる」ために，公衆に遺贈した．さらに追加として，とくに，若い技術者と芸術家の奨励と養成のために，6万ターラーを財団に提供した．

精通した美術収集家であるリンデナウが好んだのは，イタリアのゴティークと15世紀の板画であった．大変な努力を払って，リンデナウは180点のイ

タリア絵画を収集した．これは，イタリア以外では見ることのできない，量的にも質的にも非常に価値の高い特別コレクションであった．寛大なこの遺産は今日では「国立リンデナウ博物館」となり，我々の社会主義的文化政策の意味において，設立者の意図した目的を，新しい質でもって果たしている．

彼らがどのような社会的・階級的な束縛の中にあったか，ということとは無関係に，進歩に寄与したすべての人々の活動と遺産は，我々が［ドイツ民主］共和国において保護すべき進歩的伝統に属するものである．そのために，貴族の自由主義的改革者，ベルンハルト・アウグスト・フォン・リンデナウの活動は，変わることのない，高い評価に値する．彼の精神的遺産，および，自然科学者，進歩的政治家，美術収集家としての彼の業績は，我々の豊富な文化遺産として保管され，相応に保護されなければならない．

（注）

（1）残念なことに，リンデナウは1852年の遺言書において，彼の膨大な遺稿をすべて焼却するように指示した．それによって，多くの重要な資料が燃やされてしまった．しかし，彼の決定は幸運にも，十分には守られなかった．そのために，従来あまり利用されてこなかった，いくつかの貴重な文書が，予想に反して現在も国立ヴァイマル文書館アルテンブルク分館とアルテンブルクの国立リンデナウ博物館に所蔵されている．

（2）Vgl. Gleisberg 1976.

（3）STA-AS Altenburg, FA Lindenau, Nr. 15, Bl. 78 a.（ガウス宛てリンデナウの1811年10月18日付け書簡の写し．原本は Ubi Göttingen, Nachlaß Gauß にある．）

（4）一般的には Vgl. Biermann 1979; STA-AS Altenburg, FA Lindenau, Nr. 24（1811年から31年までの天文学者・国家大臣リンデナウ宛て，および，彼に関するゲーテの書簡）; Briefwechsel 1916, S. 393.

（5）Vgl. Rükl 1977, Karte Nr. 67.

（6）STAD, KrA, Nr. 4188．アインジーデル宛てツェルリーニ将軍の1830年9月5日付け書簡，ページなし．

（7）Vgl. STAD, KrA, Nr. 4187．陸軍総司令部宛て，ドレースデン周辺の軍隊の配置と任務に関するフォン・ラーベ（von Raabe[23]）将軍の1830年9月11日付け報告，Bl. 116 ff.

（8）STAD, Nachlaß Breuer[24], Nr. 42．1830年9月22日付け書簡．

(9) Johann 1858.
(10) STAD, Nachlaß Schulenburg, Nr. 7. 1830年9月13日付け書簡.
(11) ebenda, Nr. 7. 1830年9月19日付け書簡.
(12) ebenda, Nr. 7. 1830年9月12日付け書簡.
(13) Biermann 1979, S. 238から引用.
(14) Johann 1958, S. 100 f. 王子フリードリヒ・アウグストがリンデナウの任命を促した，というシュレヒテ (Schlechte 1927)，ヴィッツレーベン (Witzleben 1881)，および，ラインハルト (Reinhardt 1916) の主張には同意できない．事実は反対で，王子フリードリヒ・アウグストは彼の伯父［国王］にツェッシャウを提案し，王子ヨハンが，ツェッシャウの内局大臣任命を提案した，兄のその書簡を［離宮］ピルニッツに持って行った時には，時すでに遅く，国王はすでにリンデナウ［の任命］を決定していたのである．
(15) STA-AS Altenburg, FA Lindenau, Nr. 18. フォン・クヴァント宛てゲーテの1831年10月10日付け書簡，Bl. 9 b.
(16) Biermann 1979, S. 239から引用.
(17) Grumpelt 1941, S. 225.
(18) STA-AS, FA Lindenau, Nr. 16, Bl. 143.
(19) Grumpelt 1941, S. 244.
(20) Mock 1935.
(21) Vgl. Heres 1982, S. 70 ff.
(22) Vgl. Seydewitz 1979, S. 136 ff.
(23) Vgl. Semper 1980, S. 41 f.
(24) STA-AS Altenburg, FA Lindenau, Nr. 12, Bl. 31.
(25) Vgl. STAD, MdI, Nr. 281. リンデナウ財団関係.

(訳注)
[1] ツァッハ (1754—1832).
[2] カルル・フリードリヒ・ガウスは数学者・天文学者 (1779—1855).
[3] フリードリヒ・ヴィルヘルム・ベッセル (1784—1846).
[4] カルル・アウグストはザクセン・ヴァイマル・アイゼナッハ公 (1757—1828. 1815年から大公).
[5] ゴータ・アルテンブルク公フリードリヒ四世 (1774—1825). しかし，病弱な彼が当主となった1822年以来，実質的にはリンデナウが統治していた.
[6] ザクセン・コーブルク公エルンスト三世 (1784—1844). 1826年の相続契約によって彼はザクセン・コーブルク・ゴータ公となった.
[7] ザクセン・ヒルドブルクハウゼン公フリードリヒ (1763—1834). 1826年の相続契約によって彼は旧領地を放棄し，新系統のザクセン・アルテンブルク公となった.
[8] ザクセン・マイニンゲン公ベルンハルト二世 (1800—82). 1826年の相続契約によっ

て彼はザクセン・マイニンゲン・ヒルドブルクハウゼン公となった．ただし，1866年に退位．

[9] フリードリヒ・アルブレヒト・フォン・デア・シューレンブルク伯爵（1772—1853）．

[10] 「ザクセンの1831年憲法は主としてリンデナウに負っている」．ただし，彼は，改革において先行したプロイセンに関して，1819年に次のように考えていた．「私は，1812年から15年まではプロイセンを祖国の救済者・保持者と考えていたが，その後，見解を変えた」．「プロイセンの鷲の重圧的な庇護の下にはいる」という考えは，彼にとって，「腹立たしい」ものであった．そのために彼は，彼が主導した中部ドイツ商業同盟を擁護し，プロイセン関税体系の拡大に反対した．しかしながら，プロイセン関税同盟への加入が間もなく実現したのであった．Ruhland, "Zum Leben...", 1992, S. 4.

[11] アウグスト・エミール・ブラウンは考古学者（1809—56）．

[12] フリードリヒ・ゴットリープ・ベッカー（1792—1865）は48年にはドイツ立憲国民議会の議員であった．

[13] カルル・ヘルマン・シャイトラーは哲学者（1795—1866）．

[14] ヨハン・ゴットロープ・フォン・クヴァント（1787—1859）．

[15] ヨハン・ゴットリープ・マテーイ（1753—1832）．

[16] ヘルマン・フォン・フリーゼン男爵（1802—82）は式部官で，「ザクセン芸術協会」の創設者のひとり．

[17] カルル・クリスティアン・フォーゲル・フォン・フォーゲルシュタインは画家（1786—1868）．

[18] フェルディナンド・ハルトマンは画家（1774—1842）．

[19] エドゥアルド・ベンデマンは画家（1811—89）．

[20] リヒターは画家・製図家（1803—84）．

[21] リーチェルは彫刻家（1804—61）．

[22] ゼンパーは建築家（1803—79）．

[23] 1823年に少将となったグスタフ・ルートヴィヒ・フェルディナンド・フォン・ラーベ（1774—1837）．

[24] ザクセンの上級官吏フリードリヒ・ルートヴィヒ・ブロイアー（1786—1833）．

（I）引用史料・文献目録

文書館の名称は1992年論文による．文献における［　］は編訳者の追加である．

SHB＝*Sächsische Heimatblätter*.

(1) 史料

(i) STAD (Staatsarchiv Dresden) :

GK (=Geheimes Kabinett), Loc. 2259. Acta, die Auflösung der Bürger-Nationalgarde zu Dresden betr. 1830/31.

——, Loc. 2431. Die Organisation der Kommunalgarden betr. 1830.

——, Loc. 3453.

——, Loc. 13544. Aufzeichnungen des Staatsministers a. D. v. Könneritz über die Erhebung des Prinzen Friedrich August zum Mitregenten 1830.

GS-Berlin (=Gesandtschaft Berlin), Nr. 132.

HA Johann (=Hausarchiv Johann), Nr. 4 a. Denkschrift des Gouverneurs der Stadt Dresden über die Ereignisse vom 17./18. April 1831; Denkschrift des Gouverneurs vom 25. 4. 1831 über die Leistungen der Kommunalgarden während der Dresdner Aprilunruhen.

——, Nr. 8 L. Schriftstücke über die Verhältnisse der Kommunalgarden in verschiedenen Orten des Landes betr.

——, Nr. 49 b. Übersicht sämtlicher Gardisten, die bis 27. 4. 1831 aus den Kompanien entwaffnet und entlassen wurden; Übersicht der Mannschaftszahlen, welche laut Generalkommando-Order vom 8. vorigen Monats von der Kommunalgarde zu Dresden in Abgang gebracht worden ist, vom 24. 6. 1831.

——, Nr. 151 a. Briefwechsel mit Ernst von Manteuffel.

KrA (=Kriegsarchiv), Nr. 4048. Kommunalgarden-Regulativ vom 29. 11. 1830.

——, Nr. 4185. Die tumultarischen Auftritte in Sachsen und die deshalb getroffenen Verfügungen betr. 1830, unpag.

——, Nr. 4187. Meldung Generals von Raabe an das Generalkommando über die Stationierung und Aufgaben der um Dresden liegenden Truppenverbände vom 11. 9. 1830.

——, Nr. 4188. Die tumultarischen Auftritte in Sachsen und die deshalb getroffenen Verfügungen betr. 1830–1831. Intus: *Merkur*, Nr. 115 vom 11. 11. 1830; Schreiben General Cerrinis an Einsiedel vom 5. 9. 1830, unpag.

——, Nr. 6569–6592.

——, Nr. 6593. Stammlisten der Bürger-National- und Bürger-Gendarmerie mit Nachträgen betr. 1825–1830.

——, Nr. 6594–6611.

MdI (=Ministerium des Innern), Nr. 281. Die Lindenausche Stiftung betr.

——, Nr. 991. Die aufgelöste 6. Kompanie der Leipziger Kommunalgarde betr.

——, Nr. 992. Die Revision der Gesetzgebung über Kommunalgarden-Wesen.

——, Nr. 993 a. Die Organisation und Verhältnisse der Kommunalgarden im Allgemeinen betr.

——, Nr. 994. Erläuternde Bestimmungen zur Kommunalgarden-Gesetzgebung.
——, Nr. 1000. Das General-Kommando der Kommunalgarden betr.
——, Nr. 1010. Die von der Kommunalgarde zu leistenden Dienste.
——, Nr. 1013. Die Kompetenzverhältnisse in Kommunalgarden-Strafsachen.
Nachlaß August (=Nachlaß Friedrich August II.), Nr. 35 r. Aufzeichnungen des Prinzen die Kommunalgarde 1830 betr.
——, Nr. 103. Brief vom 14. Oktober 1830.
——, Nr. 114. Brief vom 30. Dezember 1830.
Nachlaß Breuer, Nr. 42. Brief vom 22. 9. 1830.
Nachlaß Johann (=Nachlaß König Johann), Nr. 7 D. Bekanntmachung des Gouverneurs und Kommandanten der Kommunalgarde zu Dresden von Gablenz vom 4. 12. 1830 über die Ausschreitung bei der Auflösung der Bürger-Nationalgarde.
——, Nr. 7 E. Festlieder auf die Errichtung der Kommunalgarde.
——, Nr. 8 B. Schriftstücke betr. die Verhältnisse der National-Kommunalgarde in Dresden 1830/31.
Nachlaß Schreibershofen (=Nachlaß General Max von Schreibershofen, Erinnerungen aus meinem Leben, H. 3).
Nachlaß Schulenburg (=Nachlaß v. d. Schulenburg), Nr. 7. Briefe vom 12. 9. 1830, vom 13. 9. 1830 und vom 19. 9. 1830.
OLG (=Oberlandesgericht Dresden), Nr. 85, 126.
——, Nr. 134. Beschlagnahmte Papiere des Advokaten Moßdorf 1831 betr. (*Constitution, wie sie das sächsische Volk wünscht*, Dresden 1831.)
——, Nr. 138. *Die Communalgarde wie sie ist und wie sie seyn soll*, Dresden 1831.
——, Nr. 250, 252, 286.
——, Nr. 292. Carl Richter-Rosen, "1831 und 1848", in: *Deutscher Volksfreund*, Nr. 34, vom 20. Juni 1848.
——, Nr. 306-307. Die Untersuchungsakten der stattgefundenen Unruhen bei der Bekanntmachung der Anordnung über die Auflösung der Bürger-Nationalgarde zu Dresden am 4. 12. 1830.
——, Nr. 308-324. Untersuchungsakten der Untersuchungskommission, die Unruhen im August 1831 in Leipzig betr.

(ii) STA-AS Altenburg (Staatsarchiv Weimar, Außenstelle Altenburg) :

FA Lindenau (=Familienarchiv von Lindenau), Nr. 12.
——, Nr. 15. Kopie eines Briefes Lindenaus an Gauß vom 18. 10. 1811.
——, Nr. 16.
——, Nr. 18. Brief Goethes an v. Quandt vom 10. 10. 1831.
——, Nr. 21.
——, Nr. 24. Briefe Goethes an und über den Astronomen und Staatsminister Bernhard

von Lindenau, 1811–1831.

(iii) STA-DS Merseburg (Zentrales Staatsarchiv, Dienststelle Merseburg) :
MdA (=Ministerium der auswärtigen Angelegenheiten, 2. 4. 1, Abt. 1, Dresden, Correspondance avec la Mission du Roi), Nr. 3842. Bericht vom 13. 9. 1830.
SGS (=Sächsische Gesandtschaft), Nr. 3841. Bericht vom 21. 4. 1831.

(iv) STA Wien (Österreichisches Staatsarchiv, Abt. Haus- Hof- und Staatsarchiv Wien, Staatskanzlei, Sachsen, Korrespondenz) :
Nr. 64. Bericht vom 19. 4. 1831.
Nr. 72. Berichte vom 10. 9. 1830 und vom 12. 9. 1830.

(v) Stadtarchiv Dresden:
Nr. 63 = Archiv der National-Bürger-Garde, Sign. C/XII, Nr. 63.
Nr. 71 = ——, Sign. C/XX, Nr. 71.

(vi) Ubi Göttingen (Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen, Handschriftenabteilung) :
Nachlaß Gauß.

(2) 文献

Biermann 1979 = K[urt] R. Biermann, "Bernhard August von Lindenau, Weggefährte und 'Widersacher' Goethes", in: *Goethejahrbuch 1979*.

Briefwechsel 1911 = *Briefwechsel zwischen König Johann von Sachsen und den Königen Friedrich Wilhelm IV. und Wilhelm I. von Preußen*, hrsg. von Johann Georg, Herzog zu Sachsen und Hubert Ermisch, Leipzig.

Briefwechsel 1916 = *Briefwechsel des Herzogs-Großherzogs Carl August mit Goethe*, [hrsg. von Hans Wahl,] Bd. 2 [, Berlin].

Brockhaus 1884 = H[einrich] Brockhaus, *Aus den Tagebüchern von Heinrich Brockhaus*, Bd. 1, Leipzig.

Carus 1866 = Carl Gustav Carus, *Lebenserinnerungen und Denkwürdigkeiten*, Bd. 3, Leipzig.

Czok 1989 = Karl Czok (Hrsg.), *Geschichte Sachsens*, Weimar.

Friedrich 1968 = *Caspar David Friedrich in Briefen und Bekenntnissen*, hrsg. von S[igrid] Hinz, Berlin.

Friedrich 1985 = K[arl]-L[udwig] Hoch (Hrsg.), *Caspar David Friedrich——Unbekannte Dokumente seines Lebens*, Dresden.

Gleisberg 1976 = D[ieter] Gleisberg, *Staatliches Lindenau-Museum Altenburg. Quer-*

schnitt durch die Sammlungen, Altenburg.

Groß 1985 = Reiner Groß, "Ein königlich-sächsischer Mordfall. Exekution des revolutionären Demokratismus", in: *Unzeit des Biedermeiers. Historische Miniaturen zum Deutschen Vormärz 1830 bis 1848*, [hrsg. von Helmut Bock und Wolfgang Heise,] Leipzig / Jena / Berlin.

Grumpelt 1941 = W[erner] Grumpelt, "Aus dem Nachlaß des sächsischen Staatsministers Bernhard August Freiherr von Lindenau", in: *Zeitschrift des Vereins für die Thüringische Geschichte und Altertumskunde*, Bd. 35, Jena.

Harring 1831 = Harro Harring, *An Bernhard Moßdorf, der tiefgebeugten Mutter des Gefangenen und seiner trauernden Schwester in inniger Teilnahme gewidmet von dem Friesen*, 5. Mai 1831, Leipzig.

Heres 1982 = G[erald] Heres, "Besuch und Besucher der Dresdner Kunstsammlungen zur Goethezeit", in: *Dresdner Kunstblätter*, Bd. 26 [, H. 2].

Hottenroth 1927 = Johann Edmund Hottenroth (Hrsg.), *Woldemar Hottenroth 1802–1894. Das Leben eines Malers aus hinterlassenen Aufzeichnungen, Briefen und Tagebüchern sowie nach alten Akten, Berichten, mündlichen Überlieferungen und persönlichen Erinnerungen*, Dresden.

Huber 1960 = [Ernst] R[obert] Huber, *Deutsche Verfassungsgeschichte seit 1789, Bd. 2, Der Kampf um Einheit und Freiheit 1830–1850*, Stuttgart.

Johann 1958 = *Lebenserinnerungen des Königs Johann von Sachsen. Eigene Aufzeichnungen des Königs über die Jahre 1801 bis 1854*, hrsg. von Helmut Kretzschmar, Göttingen.

Kommunalgarde 1831 = *Die Kommunalgarde wie sie ist und wie sie seyn soll*, Dresden, in: STAD, OLG, Nr. 138.

Kowalski 1983 = W[erner] Kowalski (Hrsg.), *Vom kleinbürgerlichen Demokratismus zum Kommunismus. Die Hauptberichte der Bundeszentralbehörde in Frankfurt am Main von 1838 bis 1842 über die deutsche revolutionäre Bewegung*, Berlin.

Kretzschmar 1935 = Helmut Kretzschmar, *Sächsische Geschichte*, Bd. 2, Dresden.

Mock 1935 = H[einrich] Mock, *Führer durch das neugestaltete Lindenau-Museum in Altenburg*, Altenburg.

Moßdorf 1831 = Bernhard Moßdorf, *Constitution, wie sie das sächsische Volk wünscht*, Dresden, in: STAD, OLG, Nr. 134.

Nostitz 1832 = H[ans] C[arl] F[riedrich] v[on] Nostitz-Drzewiecki, *Die Kommunalgarden des Königreiches Sachsen in ihrer Entstehung, gesetzlichen Begründung, Organisierung* und gegenwärtigen Gestalt, Dresden.

Peters 1970 = Herbert Peters, "Patriotische Offiziere in der antifeudale Vormärzbewegung in Deutschland", in: *Militärgeschichte*, Bd. 9, H. 2.

Reinhardt 1916 = P[aul] Reinhard, *Die sächsischen Unruhen der Jahre 1830–1831 und Sachsens Übergang zum Verfassungsstaat*, Halle.

Richter-Rosen 1848 = Carl Richter-Rosen, "1831 und 1848", in: *Deutscher Volksfreund*, Nr. 34, vom 20. Juni 1848, in: STAD, OLG, Nr. 292.

Rükl 1977 = A[ntonin] Rükl, *Mond-Mars-Venus: Taschenatlas*, Prag.

Ruhland 1981 = Volker Ruhland, *Die Rolle der Volksmassen, der Bourgeoisie und der herrschenden Klasse in den revolutionären Ereignissen 1830/31 in Dresden*, Diss. A, PH Dresden.

Ruhland 1983(a) = ——, "Der Bürgerverein 1830/31", in: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Pädagogischen Hochschule Dresden, Gesellschaftswissenschaftliche Reihe*, Bd. 17, H. 3.

Ruhland 1983(b) = ——, "Bernhard Moßdorfs Verfassungsentwurf——ein einmaliges Dokument der Geistesgeschichte Dresdens", in: *Dresdner Hefte. Beiträge zur Kulturgeschichte*, Bd. 1, H. 3.

Ruhland 1983(c) = ——, "Die Ereignisse am 17. und 18. April 1831 in Dresden und die Niederschlagung der bürgerlich-demokratischen Oppositionsbewegung durch die herrschende Klasse", in: *SHB*, Bd. 29.

Ruhland 1984 = ——, "Benrhard August von Lindenau und die antifeudalen Volksbewegungen der Jahre 1830/31 im Königreich Sachsen", in: *Jahrbuch der Staatlichen Kunstsammlungen Dresden*, Bd. 14. (本訳第3節)

Ruhland 1987 = ——, *Untersuchungen zu Rolle und Formen der Bürgermilizen im Prozeß der bürgerlichen Umwälzung in Deutschland, unter besonderer Berücksichtigung der Kommunalgarden im Königreich Sachsen*, Diss. B, PH Dresden, 2 Bde.

Ruhland 1989 = ——, "Rolle und Formen der Bürgermilizien im Prozeß der bürgerlichen Umwälzung in Deutschland unter besonderer Berücksichtigung der Kommunalgarden im Königreich Sachsen", in: *SHB*, Bd. 35

Ruhland 1990 = ——, "Kommunal- und Bürgergarden in der zweiten Etappe der bürgerlichen Umwälzung (1830–1847)", in: *SHB*, Bd. 36.

Ruhland 1992(a) = ——, "Prinz Johann als Generalkommandant der sächsischen Kommunalgarden", in: *SHB*, Bd. 38. (本訳第1節)

Ruhland 1992(b) = ——, "Bernhard Moßdorf (1802–1833). Vom Burschenschaftler zum Demokraten", in: *Sächsische Heimat*, Bd. 38. (本訳第2節)

Schlechte 1927 = A[lexander] Schlechte, *Die Vorgeschichte der sächsischen Verfassung vom 4. September 1831*, Diss. Leipzig.

Semper 1980 = *Gottfried Semper zum 100. Todesjahr. Ausstellungskatalog zur Semperehrung der DDR 1979, Dresden 1979*, Dresden.

Seydewitz 1979 = M[ax] Seydewitz, *Dresden, Musen und Menschen. Ein Beitrag zur Geschichte der Stadt, ihrer Kunst und Kultur*, 5. Aufl., Berlin.

Steiger 1981 = Günter Steiger (Hrsg.), *Magister und Scholaren——Professoren und Studenten. Geschichte deutscher Universitäten und Hochschulen im Überblick*, Leipzig/Jena/Berlin.

Stolle 1835 = F[erdinand] W. Stolle, *Die sächsische Revolution oder Dresden und Leipzig in den Jahren 1830 und 1831*, Leipzig.

Studentenbriefe 1898 = "Drei Studentenbriefe aus der Zeit der sächsischen Erhebung im Jahre 1830", in: *Neues Archiv für sächsische Geschichte*, Bd. 19.

Witzleben 1881 = C[äsar] D[ietrich] v[on] Witzleben, *Die Entstehung der constitutionellen Verfassung des Königreiches Sachsen*, Leipzig.

Zwahr 1984 = Hartmut Zwahr, "Sachsen im Übergang zum Kapitalismus und im Revolutionsjahr 1830", in: *SHB*, Bd. 30.

(Ⅱ) 著者の業績目録

BzS = *Beiträge zur Sachsenforschung* (Dresden, Pädagogische Hochschule)
DH = *Dresdner Hefte. Beiträge zur Kulturgeschichte*
EHB = *Erzgebirgische Heimatblätter*
FK = *Familien-Kalenderbuch* (Waltersdorf)
GEP = *Geschichte, Erziehung, Politik*
SH = *Sächsische Heimat*
SHB = *Sächsische Heimatblätter*
SZD = *Sächsische Zeitung Dresden.*

(1) "Räuberhauptmann Johannes Karraseck", in: *FK*, 1969, S. 148–149.

(2) *20 Jahre sozialistische Fachlehrerausbildung in Dresden. Chronik zur Geschichte der Pädagogischen Hochschule "Karl Friedrich Wilhelm Wander" Dresden (1953–1973)*, 1974, Diplomarbeit an der PH Dresden. (Martina Hampel, Wolfgang Rascher と共同執筆)

(3) "Die revolutionären Ereignissen in Dresden in den Jahren 1830/31", in: *Jahrbuch zur Geschichte Dresdens 1980*, 1979, S. 69–77.

(4) *Die Rolle der Volksmassen, der Bourgeoisie und der herrschenden Klasse in den revolutionären Ereignissen der Jahre 1830/31 in Dresden*, Diss. A, PH Dresden 1982, 2 Bde., 186 Bl., 93 Bl.

(5) "Der Bürgerverein 1830/31", in: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Pädagogischen Hochschule Dresden, Gesellschaftswissenschaftliche Reihe*, Bd. 17, H. 3, 1983, S. 47–57.

(6) "Bernhard Moßdorfs Verfassungsentwurf——ein einmaliges Dokument der Geistesgeschichte Dresdens", in: *DH*, H. 3, 1983, S. 45–50.

(7) "Die Ereignisse am 17. und 18. April 1831 in Dresden und die Niederschlagung der bürgerlich-demokratischen Oppositionsbewegung durch die herrschende Klasse",

in: *SHB*, Bd. 29, H. 1, 1983, S. 16-20.

(8) "Benrhard August von Lindenau und die antifeudalen Volksbewegungen der Jahre 1830/31 im Königreich Sachsen", in : *Jahrbuch der Staatlichen Kunstsammlungen Dresden*, Bd. 14, 1984, S. 73-83. (本訳第3節)

(9) "Als die National-Bürgergarde vor den Hauptwachen aufzog: das Bürgermilitär in Dresden in der 1. Hälfte des 19. Jahrhunderts", in: *SZD*, Bd. 40, 1985, Nr. 238 vom 11. 10., Beilage.

(10) *Untersuchungen zu Rolle und Formen der Bürgermilizen im Prozeß der bürgerlichen Umwälzung in Deutschland, unter besonderer Berücksichtigung der Kommunalgarden im Königreich Sachsen*, Diss. B, PH Dresden, 2 Bde., 1987, 192 Bl., 113, 15 Bl.

(11) "Entstehung und Charakter der Kommunalgarden im Königreich Sachsen 1830/31", in: *Jahrbuch für Regionalgeschichte*, Bd. 14, 1987, S. 228-242. (Roland Zeise と共同執筆)

(12) "Zur Rolle der erzgebirgischen Kommunalgarden 1830/31 und 1848/49", in: *EHB*, 1988, H. 5, S. 135-140.

(13) "Die Französische Revolution von 1789 und ihre Auswirkung auf Sachsen——ein politikgeschichtlicher Überblick", in: *DH*, Bd. 7, H. 2, 1989, S. 2-14.

(14) "Die Revolution der Franzosen und ihre Auswirkungen auf Sachsen", in: *SZD*, Bd. 44, 1989, vom 22. 9., 23. 9. und 29. 9., Beilage.

(15) "Gottfried Semper und der Dresdener Maiaufstand 1849", in: *Dresdner Kunstblätter*, Bd. 33, H. 4, 1989, S. 98-114.

(16) "Rolle und Formen der Bürgermilizien im Prozeß der bürgerlichen Umwälzung in Deutschland unter besonderer Berücksichtigung der Kommunalgarden im Königreich Sachsen", in: *SHB*, Bd. 35, H. 5, 1989, S. 221-231.

(17) "Kommunal- und Bürgergarden in der zweiten Etappe der bürgerlichen Umwälzung (1830-1847)", in: *SHB*, Bd. 36, H. 1, 1990, S. 39-44.

(18) "Zur Rolle der sächsischen Bürgermilizien im Prozeß der bürgerlichen Umwälzung", in: *Probleme der bürgerlichen Umwälzung in Sachsen 1830-1871*, Dresden, Pädagogische Hochschule, 1990, S. 36-45.

(19) "Augusteischer Absolutismus in Kursachsen: zu seiner Herausbildung", in: *Dresdner Stadtrundschau*, Bd. 45, 1991, S. 14.

(20) "Die bürgerliche Revolution von 1830/31 und Sachsens Übergang zum Verfassungsstaat", in: *DH*, Bd. 8, H. 26, 1991, S. 5-12.

(21) "Sächsischer Feudalstaat in der Krise: bürgerliche Revolution und bürgerliche Reformen——Sachsens Übergang zum Verfassungsstaat", in: *SHB*, Bd. 37, H. 4, 1991, S. 194-198.

(22) "Von der ersten sächsischen Verfassung 1831 zur Verfassung des Freistaates Sachsen 1920", in: *BzS*, 1991, S. 4-8. (Günter Kirsch と共同執筆)

(23) "Die Verfassung vom 4. September 1831: erste schriftliche Verfassung in der Geschichte Sachsens", in: *SH*, Bd. 37, H. 6, 1991, S. 201-207.

(24) "Grundpositionen zum Anteil der Sächsischen Landesgeschichte in der Fachausbildung von Geschichtslehrern", in: *BzS*, 1991, S. 29-39. (Gerhard Billig と共同執筆)

(25) "Sächsische Landesgeschichte in Schule und Lehrerausbildung", in: *SHB*, Bd. 37, H. 6, 1991, S. 376-383. (Gerhard Billig と共同執筆)

(26) "Dresden im Preußisch-Österreichischen Krieg 1866 (zum 125. Jahrestag)", *SH*, Bd. 37, H. 8, 1991, S. 257-262.

(27) "Bernhard August von Lindenau, Sachsens Hardenberg, erster bürgerlicher Regierungschef 1830-1843", in: *SH*, Bd. 37, H. 10, 1991, 341-343.

(28) "Prinz Johann als Generalkommandant der sächsischen Kommunalgarden", in: *SHB*, Bd. 38, H. 1, 1992, S. 13-20. (本訳第1節)

(29) "Bernhard Moßdorf (1802-1833). Vom Burschenschaftler zum Demokraten", in: *SH*, Bd. 38, H. 7, 1992, S. 176-183. (本訳第2節)

(30) *Auf dem Weg zum bürgerlichen Verfassungsstaat*, Dresden, Verlag des Staatlichen Schulamtes Dresden 1992, 117 S. (*Heimatgeschichtliche Unterrichtshilfen für Dresdner Geschichtslehrer*, Heft 6.)

(31) "Zum Leben und politischen Wirken des Bernhard August von Lindenau", in: *Acta Universitatis Purkynianae. Philosophica et Historica I, Opera Historica I*, hrsg. von Lenka Bobkova, Usti nad Labem, Universitätsverlag 1992, S. 204-211.

(32) "Die bürgerliche Nationalgarde in Dresden 1809-1830", in: *SH*, Bd. 39, H. 6, 1993, S. 171-175.

(33) "Böhmische Exulanten in Sachsen und in der Oberlausitz", in: *SH*, Bd. 39, H. 8, 1993, S. 274-282.

(34) "Grundzüge sächsischer Außenpolitik während der Zeit des Deutschen Bundes unter besonderer Berücksichtigung des Jahres 1866", in: *SHB*, Bd. 39, H. 4, 1993, S. 235-238.

(35) "Jean Victor Moreau (1763-1813), ein französischer Revolutionsgeneral in Dresden", in: *SHB*, Bd. 39, H. 6, 1993, S. 355-356.

(36) "Jean Victor Moreau in Dresden 1813", in: *SH*, Bd. 39, H. 4, S. 99-102.

(37) *Sachsens Mordbrenner, Räuber, Pascher und Wildschützen im Erzgebirge und in der Oberlausitz*, Berlin, Altis-Verlag 1993, 240 S. (Annette Kura, Roland Unger と共同執筆)

(38) "Wilhelm August Tirnstein. Ein politisch aktiver Schneidergeselle aus Dresden im Vormärz", in: *SH*, Bd. 39, H. 7, 1993, S. 220-223.

(39) "Böhmische Exulanten in Sachsen und in der Oberlausitz", in: *Sachsen und Böhmen im Wandel der Geschichte*, hrsg. von Kristina Kaiserova, Usti nad Labem, Universitätsverlag 1993, S. 122-132.

(40) "Der Dreißigjährige Krieg und Kursachsen", in: *SHB*, Bd. 40, H. 6, 1994, S. 325-333.
(41) "Militärpolitik und Heeresorganisation 1803-1813", in: *DH*, H. 37, 1994, S. 56-66.
(42) "Vom Beginn des Baues der ersten Ferneisenbahn Leipzig-Dresden", in: *SH*, Bd. 40, H. 4, 1994, S. 164-166.
(43) "Detlev Graf von Einsiedel. Sächsischer Kabinettsminister zwischen Ancien regime und bürgerlichem Zeitalter (1813-1830)", in: *SH*, Bd. 40, H. 6., 1994, S. 258-262.
(44) "Sächsische Landesgeschichte in Schule und Universität", in: *GEP*, 1994, H. 2, S. 82-96. (Gerhard Billig と共同執筆)
(45) "Kursachsen im Dreißigjährigen Krieg und böhmische Exulanten im Erzgebirge", in: *EHB*, 1994, H. 5, S. 10-15.
(46) "Ein unbekanntes Dokument über die Erhebung des Prinzen Friedrich August zum Mitregenten 1830", in: *Neues Archiv für Sächsische Geschichte*, Bd. 65, 1994, Weimar, S. 217-226.
(47) "Der Humanist und Montanwissenschaftler Georgius Agricola——ein sächsischer Gelehrter von europäischem Rang", in: *SZD*, Bd. 49, 1994, Nr. 65 von 18. 3., Beilage. (Hans Prescher と共同執筆)
(48) "Der Dreißigjährige Krieg in Sachsen", in: *GEP*, 1995, H. 2, S. 91-102.
(49) "Der Dresdner Maiaufstand von 1849", in: *DH*, H. 43, 1995, S. 27-37.
(50) "Heeresorganisation und Militärwesen im Dreißigjährigen Krieg", in: *SHB*, Bd. 41, 1995, H. 6, S. 352-360.
(51) "Wilhelm von Polenz. Ein Dichter der Oberlausitz", in: *FKB 1996*, 1995, S. 16-17.
(52) "Erinnerungen an 1866. Historisches aus der Oberlausitz", in: *FKB 1996*, 1995, S. 82-83.
(53) "1346. Vor 650 Jahren erfolgte die Gründung des Oberlausitzer Sechsstädtebundes", in: *FK 1996*, 1995, S. 108-109.